

昭和27(1952)年9月 第4代 宮城 成圭 教授 就任



昭和28(1953)年4月8日～10日
第26回日整会総会 宿題報告
「キューンチャー骨髄内固定法の吟味」



昭和28(1953)年4月12日
島 北大教授里帰り歓迎会

宮城教授時代 昭和30年代初期の手術室など



①：肩外転シーネの作り方を石橋恒夫先生（現姓宮城）に伝授する松島先生

②：手術中の田中助教授・山田助手・立田助手・大下看護婦

③：手洗い中の進・古野先生ら

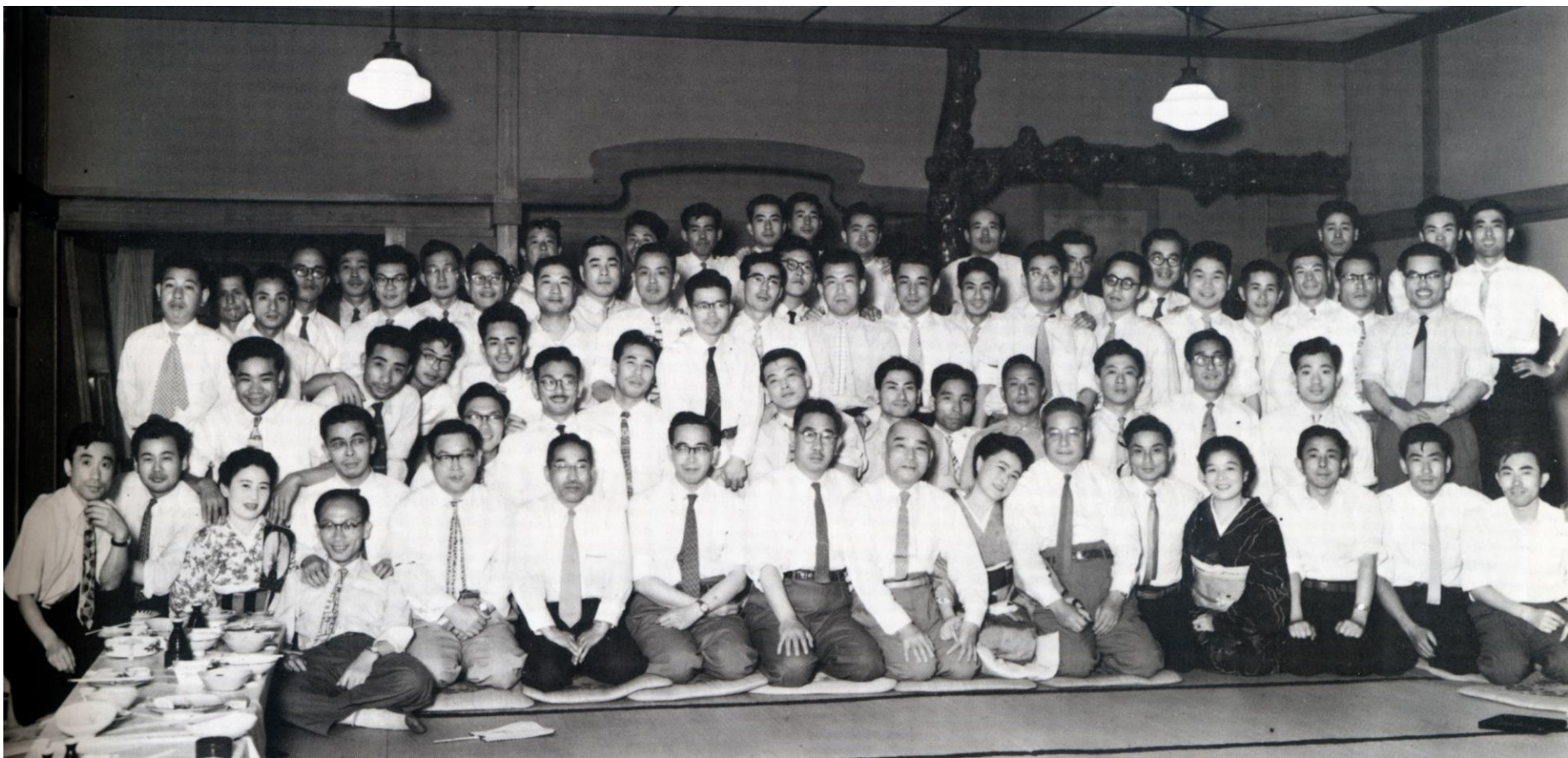
④：ゲタのはきものが懐かしい

⑤：腰椎麻酔中の松島先生



先天股脱ギブス中の古野先生と佐藤婦長

昭和32(1957)年6月15日 開講25周年記念同門会懇親会

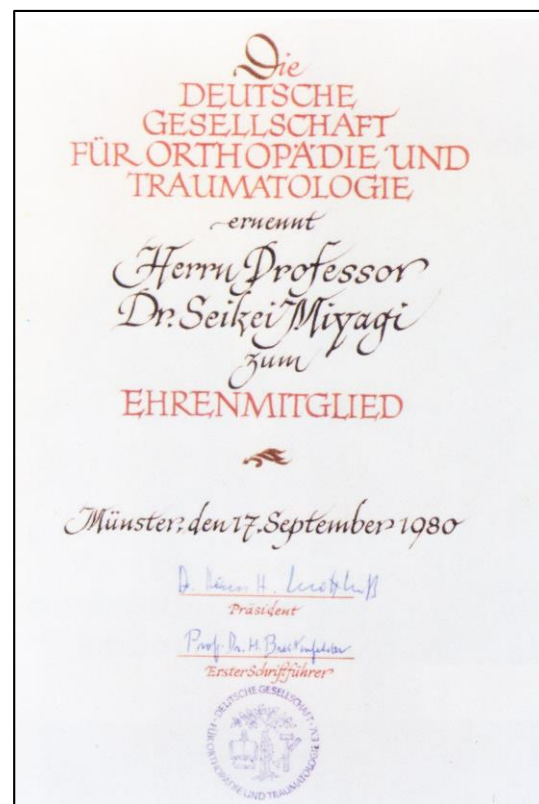


ドイツ整形災害外科学会名誉会証員授与

整形外科における業績と日独整形における貢献が高く評価され、西ドイツ ミュンスターで開催されたドイツ整形災害外科学会において、宮城教授に名誉会員証が授与された。



昭和55(1980)年9月17日 ドイツ整形災害外科学会



名誉会員証

第53回日本整形学会総会

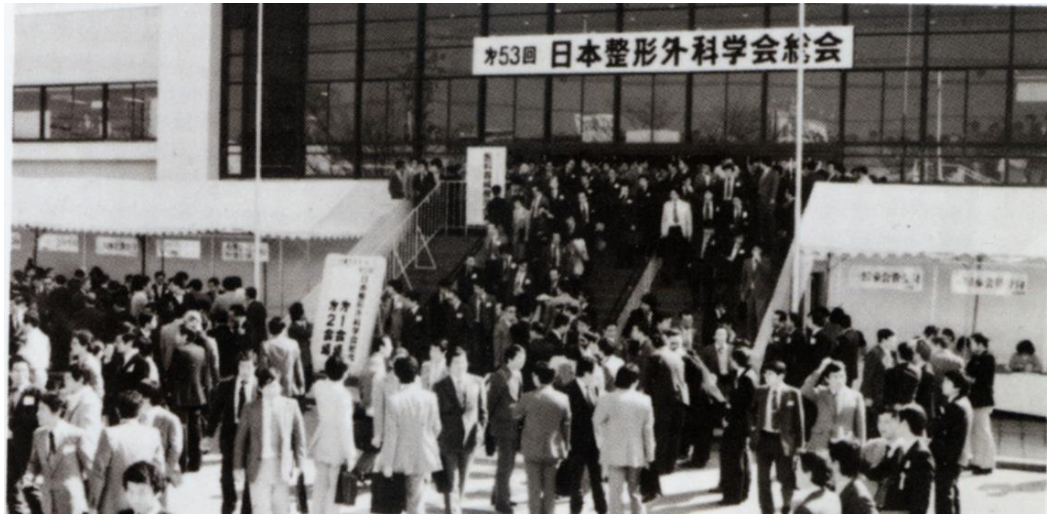
昭和55(1980)年3月30日～4月1日

会長 久留米大学整形外科 宮城成圭

昭和51年に同門会特別事業のための実行委員会が結成されたが、その目的の最たるものは、この日整会を宮城会長のもとに久留米で行うことであつた。



宮城会長 開会挨拶



会場の石橋文化センター



第4代 宮城 成圭 教授

昭和27(1952)年9月～昭和58(1983)年3月

第3代の島教授が北大教授に就任のため、昭和27年9月 34歳で九州大学より着任。以後、31年に亘り教室を主宰。骨折、外傷の第一人者として国内外で活躍、久留米大学整形外科の発展に多大な貢献。

昭和27年6月、島啓吾教授の後をうけて教室に赴任した。当時のことを回顧すると、外来・手術場は各科バラバラに分散し、入院患者は病院全病棟に分散収容され、回診では病院全部を廻る状態であった。研究室に至ってはほとんど整備されておらず、神中先生をお訪ねしたときに、何か研究の足しにと頂いたお祝いでユングのミクロームを購入して、教室で研究らしい研究が始まった。

研究活動が活発になったのは昭和29年、学位審査権獲得依頼であり、教室員の数も次第に増えてきた。教室員諸氏は医の道を違ふことなく、私をふみ越えてそれぞれの分野で最大の努力を傾け、世の人々の期待に応えて欲しい。

近況報告

— 神中 正一 教授の思い出 —

名誉教授 宮城 成圭

神中正一著、骨折治療学、昭和10年発行、診断と治療社の序文に「合理的設備を簡易化し、諸機械を安価に供給し、治療法を形式化して、これを普及させなければなるまい。」とある。先生のこの考えはImplant類の非常に大型化、複雑化、高価となった最近、骨折治療をするたびに私の脳裏に浮かんで来る。

先生の術中の原図をもとに集大成されたのが、整形外科手術書で第一版は昭和26年1月10日に出版された。先生にお願いし、巻頭に書かれたのが「学の大成を祈る」である。この著書は私の宝物であり、神中先生は今も私の心に生きておられる。

